
義愛

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

義愛

【Nコード】

N4740B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

かつて台湾が日本であった時代。そこに赴任してきた森川巡査は現地の人達の為にその命を捧げた。台湾で今も義愛公と言われその名を残す森川清治郎巡査のお話です。

第一章

義愛

日本人がなくなったものは多いと言われる。そういったものはまだ存在しているのだろうか少なくなってしまったのは確かだそれは残念なことには否定出来ない。

だがそれでもそれを今見ることが出来る。ここに一人の人の話が残っている。

台湾嘉義縣東石郷副瀨村富安宮。そこに像が一つある。見れば昔の日本の警察官の服を着ている。髭は濃く、まるで中国によくある関帝廟の様である。だがそうではないのはわかった。

「これは一体」

私はその像を見上げてこれが誰のものかと思った。

「関羽ではないようだし」

「ははは、関菩薩と思われましたか」

それを聞いた当地のお年寄りが私の言葉を聞いて笑った。

「まあ確かに似ていなくもないですね」

「あつ、貴方は」

私はここでお年寄りの言葉を聞いてはたと気付いた。彼は日本語を話していたのだ。

「御存知だと思いますが」

お年よりは私に顔を向けてにこりと笑ってまた日本語で語り掛けた。

「私がどうしてそちらの言葉を話せるのか」

「ええ、勿論」

私も微笑んでそれに返した。その理由はわかっている。

日本はかつて台湾を統治しており日本語教育を行っていたのだ。その名残りである。もう話せる人もかなり少なくなってきたと言われているが。

「この方はね、日本人なんですよ」
「まさか」

私はその言葉をまずは疑った。

「そんな筈が」

「ないと仰るのですね」

「こちらのことは知っていますつもりですが」

台湾のお年寄りの方々が日本統治時代を覚えていてそれを懐かしむ気持ちも好意も持っていることも若い人達が日本の流行を追い求めて知っていることも知っている。日本には好意的な国であることは私も知っていた。だが幾ら何でもこれは。まるで神様ではないかと思っ

た。
「しかしそれでも」

「素晴らしい方でなければこうなりませんよ」

お年寄りはまた私にこう言った。

「それだけの方だったのです」

「それだけの」

こう言われるとこの像になった人物に興味を持った。

「というとかなりの方なのですね」

「その通りです」

実に見事な日本語だった。台湾の前の総統がかなり、いや完璧なまでの日本語を話しているのは聞いているが。このお年寄りの日本語も素晴らしかった。

「御存知ないのですか」

「八田與一さんは知っていますが」

「ほお」

お年寄りは私の言葉を聞いて声をあげた。

「あの方をですか」

「ここにダムを築かれたそうで」

「はい、立派な方でした」

その人のことを聞くと顔が更に綻んでいた。

「私達の為に働いて下さつて。今は極楽に奥様とおられますよ」
「ですね」

八田という人は技術者であり台湾の二つのダムを計画している。第二次世界大戦中に南洋に向かう途中で乗っていた船が沈められ死んでいる。その奥方は終戦後子供達に別れを告げて夫が作り上げたダムに身を投げた。その墓も銅像も台湾にある。夫婦で墓があるのだ。日本風の墓が。

「他にもね。おられるんですよ」

「三人の英霊も」

「ええ」

台湾沖航空戦において敵の戦闘機に体当たりして散華した三人の航空兵達を祭つてくれているのだ。有り難いことだ。

「この方もその方々と同じなのですよ」

「どういった方なのでしょう」

「お時間はありますか？」

「旅中ですので」

私は答えた。

「何のあてもなくぶらぶらしております」

「そうですね。ではこちらへ」

お年寄り私は私を店に案内してくれた。何か日本に昔よくあったような懐かしい喫茶店である。

「御老人のお店ですか？」

「はい、そうです」

木造のレトロな店の中に案内して答えてくれた。

「私が子供の頃よく見た店でした」

「ですね」

何となく戦前によくあったような感じの店だ。

「けれどクレーンがありますよ。安心して下さい」

「ははは、そうですね」

その言葉に肩の力が抜けた。

「リラックスしてね、お話ししよう」
「そうですね。じゃあ」

木造の古風なカウンターに座りメニューを見る。だが残念なことに中国語なのでよくわからなかった。

「ええと」

「コーヒーはどうですか？」

お年寄りはまだカウンターに移っていた。そこから私に声をかけてきた。

「いや、この場合は」

「カウヒイですかね」

「随分古い呼び方ですね」

「このお店を見えていますとね」

私は店の中を見回して応えた。テーブルも椅子も木造で趣きがある。客は今は私以外には誰もいなかった。

「その呼び方で」

「芥川とかそんな感じですね」

「芥川も御存知なのですか」

「日本の作家の本も若い頃読みましたからね」

カウヒイを用意しながら答えてくれた。

「覚えていますよ。河童とか」

「河童も」

「あれはかなり参っていましたね」

お年寄りは悲しい顔になって語った。

「あれからすぐだったのでしょうか？あの人が自殺したのは」

「はい」

私はそれに答えた。

「あれは確か遺稿の一つです」

「やはり」

「どうも色々あったようですから」

私は語った。

「芥川は死ぬ前の二年程はずっとああでした」

「そうなのですよね、それまではあんなことはなかったのに」

「悩んで悩んで悩んだすえにだったのでしょうか」

「自殺したと」

「けれど名前は残ってますがね」

私は言った。

「自殺したのは残念ですが」

「けれど。そうするしかなかったのかも知れませんか」

お年寄りには私にカウヒイを差し出して言った。

「あの方と同じで」

「そのあの方ですが」

私はカウヒイを手に取りながら尋ねた。

「どういった方なのでしょうか」

「はい」

まずは一呼吸置いた。それからまた口を開いた。

「ではお話させてもらいますね」

「お願いします」

私は頼んだ。そして老人の言葉に耳を傾けさせた。その話は今の日本には本当に少なくなってしまった、懐かしくも美しく、そして悲しい話であった。

第二章

森川清治郎という人がいた。山梨に生まれたと言われている。それから神奈川に移った。山梨、神奈川といっても生まれはまだ江戸時代の文久元年、一八六一年であった。小柄でよく肥えた体格の人であった。顔には濃い、そして長い髭を持ちそれを自慢にしていた。性格は生真面目で清廉であった。信仰も心得ていてよく神仏を敬ったという。昔ながらの気質の人であったようだ。酒や煙草を好んだという。

長じて看守となり横浜の監獄に務めた。そこで結婚し子をもうけた。まずは普通の人であった。

それが変わったのは時代によるものであった。日清戦争を経て台湾が日本のものとなった。それに伴い統治において治安を維持する警官が必要となったのである。

このことが彼の耳にも伝わった。それで思うところがあった。まずはそれを妻に話してみた。

「台湾といますと？」

妻のちよは最初台湾と聞いて首を傾げさせた。

「何処にあるのでしょうか、それは」

「清の南の方にあるらしい」

「清といますと」

「シナだ」

森川は妻にそう言った。

「そう言えばわかるか」

「ええ、それでしたら」

それならばわかった。シナとは中国の通称である。戦前はよく使われた。始皇帝の秦からはじまったもので英語読みのチャイナから来ているのだ。

「そこにある島でな」

「はあ」

「この前の戦争で日本のものになったのだ」

「ああ、あそこですか」

「そこまで言われてようやくわかった。納得したように頷いた。

「それでそこがどうしたのですか？」

「何でも今そこで警官を募集しているらしい」

「警官をですか」

「うむ、それでな」

森川は髭に手をやりながら言う。濃い髭なので指にも引つ掛かる。

「わしは台湾へ行こうかと考えている」

「そこにですか」

「実はな、彼の地は何かと大変らしい」

「そうなのですか」

「ちよは知らなかったが台湾はまだ未開の地と言ってよく部族間の抗争や黒社会の支配等があり無法地帯であったのだ。疫病や阿片等もはびこり清としても見捨てていたのである。だから日本に台湾を割譲しても何も思わなかったのだ。中華風に言うならば『華外の地』であったのだ。

「今からそこで治安をよくし、人々を教え導く人材を求めているのだ」

「それに行かれると」

「わしは百姓の出だがな」

森川は言う。

「それでも心は士族でありたい。だから」

「行かれるのですね」

「当分御前と真一にはここにいてもらおう」

自身の子のことである。

「まずはわし一人で行きたいのだ」

「そして彼の地でお仕事を果たされたいと」

「よいか？」

そう言ってから妻に顔を向けてきた。その目をじっと見る。
「それで」

「私は貴方の妻です」

ちよの最初の言葉はこうであった。

「妻は夫に従い、それを支えるものです」

かつての価値観であった。ちよは明治の日本の女であったのだ。

「ならばそれをどうして拒みましようか」

「済まぬな」

森川はそれを聞いてあらためて礼を述べた。

「御前には苦勞をかけるだろうが」

「そんなことは構いません」

ちよはこうも言った。

「それよりも御自身のお仕事を」

「済まぬな。では行って来る」

「御気をつけて」

ちよは夫に対して一時の別れの言葉を告げた。

「そして立派なお仕事を」

「うむ」

森川の心は決まった。彼は自ら願い出て台湾へと向かった。そしてその地で巡査に任命され正式に赴任した。

第三章

台湾に入ってみるとまずはその暑さに驚いた。

「何なんだ、ここは」

「これが台湾だ」

赴任地へ案内する下士官が彼にそう言った。

「これがですか」

「暑いだろう」

「はい」

手拭で顔の汗をぬぐう。ぬぐう側からまた汗が流れ出る。

「日本とは違うのだ、ここは」

「その様ですな」

「何もかもな。これは聞いていると思うが」

「はい、船でもよく聞かされました」

「気をつけるんだ、病も酷い」

「病も」

「わしの同僚も何人がそれで死んでいる」

台湾は風土病の多い島であった。コレラや赤痢、ペストまであった。そのせいで住民の平均寿命も極めて短く日本軍もここで多くの者が倒れているのだ。

「それに民もな。凶暴だ」

「民もですか」

「阿片もある。どうしようもないのかも知れぬ」

下士官はそう述べて溜息を吐き出した。それからまた述べた。

「だがそこによくぞ来てくれた」

「はい」

「頼むぞ、頑張ってくれ」

「わかりました、そのつもりでこちらに参りましたし」

森川も覚悟を決めていた。彼としてもここまで来て引き下がるつ

もりはなかったのだ。

「是非お任せ下さい」

「うむ」

そんな話をしてから彼は宮尾邦太郎麾下に配属した。そこに小さな派出所を設けて早速勤務に入ったのであった。そこで彼が見たものは驚くべきものであった。

「これは……」

話には聞いていた。だがそれ以上であったのだ。

そこにいる村民達はほぼ全てが読み書きを知らず、また次々と病に倒れていく。しかも盗賊が辺りをうろろし常に物騒な事件が起きていた。森川は絶句せずにはいらなかった。

話をしようにも言葉も通じない。そもそも自分が警官であるということさえわかってはいないのだ。あまりもの事態に彼は呆然とするしかなかった。

だが彼は諦めなかった。かえってさらに覚悟を決めたのであった。
「ならば」

そこに腰を据えることにした。警官としての仕事の他にも無料で寺子屋のようなものを開いて子供達に教え、そして衛生管理を教えていった。それと共に自分も村民達のことを学び言葉も覚えていった。

「駐在さんですか」

「左様です」

彼は村の長老にそう説明した。

「日本から来ました」

「はあ、今わし等を治めている人達ですな」

「そうです、貴方達は日本人ということになります
それも説明した。」

「ここは日本になりましたから」

「では今駐在さんが子供達に教えて下さっているのは日本語ですな」
「そうです」

はつきりと言った。

「あれがそうなのです」

「そうでしたか。有り難いことです」

長老はそれを聞いて顔を綻ばせた。

「しかしよいのですか？」

「何がですか？」

森川は長老の言葉に目を向けた。

「この村には何も無いというのに」

「何も無いとは」

「その。碌なものがありませんが」

長老は少し怯えているようであった。

「貧しい村でして。生きていくのがやっとなのです」

「あの」

森川にはその言葉の意味がわからなかった。首を傾げて尋ねる。

「一体何を話されているのでしょうか」

「賄賂です」

長老は言った。

「それは」

「とんでもない」

森川は賄賂と聞いて即座に憤慨の言葉を述べた。

「何故その様な卑しいことを私が」

「卑しいのですか！？」

長老はその言葉を聞いて呆気に取られていた。

「！？」

「今までそんなことを言ったお役人は見たことはありませんが」

「まさか」

森川はその言葉を疑った。

「その様なことは」

「清のお役人は皆そうでしたが」

「そうですね、清の役人は左様だったのですか」

それを聞いて納得するものがあつた。当時の清王朝は役人の腐敗が酷かつたのだ。平気で賄賂を要求し、汚職を働く者が後を絶たなかつたのである。

だが森川は違つていた。彼はあくまで清廉であつた。

「御安心下さい」

そう言つて長老を宥める。

「その様なことはありませんから」

「そうのですか」

「清はいざ知らず我が国の役人はそんなことはありません。若しあれば私が捕まえましょう」

「何か。夢の様なのですが」

「いや、夢ではありません」

さらに言つ。

「この森川清治郎誓つて貴方達を害することはありません。それを常に心に留めておいて下さい」

「わかりました。それでは」

長老はにこやかに笑つてそれに頷いた。

「今後共。宜しく願ひします」

「はい、こちらこそ」

こうして彼は村の駐在として村に溶け込んでいった。それから彼はさらに村の中に入っていく。その中で思うことができつたのであつた。

「わしはこの村人達の為に生きよう」

そう決心したのだ。そして。彼はあることを行つた。

日本から妻子を呼び寄せたのだ。妻のちよと息子の真一を台湾に呼び寄せた。一家で台湾の為に、台湾の人々の為に尽くそうと決意したからである。

第四章

「あの駐在さんの奥様がか」

「そうだ、来られるらしいぞ」

村ではそのことが話題になっていた。まさか森川が自分の妻まで呼ぶとは思わなかったからである。

「何でそんなことを」

「わからんな。どういうことだ」

「成程、そういうことか」

だが長老には彼の考えがわかった。

「あの方はわし等の為にそうして下さるのじゃ」

こう村人達に対して言った。

「わし等の為に!？」

「そうじゃ」

長老は言う。

「家族でな。わし等の為に働いて下さるおつもりなのじゃ」

「馬鹿なそんなわけがある筈がない」

「日本の駐在さんがどうしてわし等の為に」

彼等には信じられなかった。どうして日本人が自分達の為にそこまでするのか。する筈がないと思っていたからだ。

「清のお役人みたいにか？」

長老はそんな彼等に問うた。

「賄賂ばかり要求すると思っておるのか？」

「そうじゃないんですか？」

「やっぱりお役人は」

「どつやら日本のお役人は違つらしい」

長老は彼等にこう答えた。

「真面目な方々のようじゃ」

「真面目な」

「では聞くが今まであの駐在さんが間違ったことをしたことがあったか？」

長老は問う。

「ないじゃろう。そういつことじゃ」

「それじゃあ」

「わし等は」

「うむ、信じてもよい」

長老はにこやかな顔で語った。

「あの駐在さんはな。素晴らしい方じゃ」

長老の言う通りであった。森川はそれから家族ぐるみでさらに村民の為に尽くした。自費で教師を呼び、農業を教え続ける。自ら鋤を持って畑を耕し夜遅くまで泥にまみれた。教師を雇った時と同じ自分の金で農具を買って村民に与えた。まさに身を粉にして働いていた。

貧しい者には金子を、病気の者には薬を。彼は自らの身体を切っていた。時には真に自らの身体を切ることにすらあった。

ある日のことであった。海岸で事故が起こった。

「あれは」

森川が海岸を見ると海の中で一人の少年が泣いていた。どうかしたのかと思った。

「どうしたんだ!？」

森川は海岸から彼に尋ねた。

「牡蠣を獲りに海に入ったんですが」

「牡蠣をか」

「はい、そこで足を切りました」
だから泣いているのだ。

「痛くて。もう」

「待っている」

森川はそこまで聞いてすぐに動きだした。制服の上着を脱ぐとすぐに海へ飛び込んだ。

「えっ、駐在さん」

「そこを動くなよ、今行く」

「けれど」

「けれどもどうしたもない。足を怪我しているんだな」

「は、はい」

少年は答えた。

「なら大事だ。早く手当てをしないと大変なことになるからな」
もう少年のすぐ側まで来ていた。その身体を抱きかかえる。

「よし、じゃあ岸まで戻るか」

「あの、駐在さん」

突然のことなのでまだ何と言っていいのかわからない。

「どうしてここまで」

「どうしてとは？」

森川は少年を後ろに抱えながら尋ねる。

「その、村人なのに。只の」

「村人かどうかは関係ない」

森川はそれに応えて言った。

「わしはな、君達の為に働こうと誓ったからだ」

「僕達の為に」

「そうだ、だからこれ位はどうということはないんだ」
太く強い声であった。聞いているだけで安心できる。

「では家まで帰ろうか」

「僕の家までかなりありますよ」

「そっついえばそうだったな」

「ええ、ですから」

降りしてもらおうと思った。だが森川はその前に言った。

「ではそこまで行くか」

「えっ」

少年はその言葉に自分の言葉を詰まらせてしまった。

「そこまでって」

「他に行くところがあるのか？」

森川は逆に彼に問うた。

「ないだろう？じゃあそこまで連れて行く。安心しろ」

「はあ」

「今は足を大事にするんだ、いいな」

「わかりました」

その言葉にこくりと頷く。

「親御さんから貰い受けた身体だ。大事にしろ」

「……はい」

思わず涙が出た。森川の心を知ったからだ。少年はそのまま家まで送られた。玄関まで辿り着いたところで彼は森川の足に気付いた。

「駐在さん、その足」

「何、大したことはない」

見れば森川も怪我をしていた。足をバツサリと切っていた。それは少年のものよりも深い傷であった。

「すぐに治る」

「すぐにじゃないですよそんなの」

少年は慌てて彼に言った。

「すぐに手当てしないと。そうだ」

慌てて家の中に入って行く。そこから水をたっぷり入れた桶と綺麗な白い布を持って来た。

「これで。手当てして」

「済まないな」

「済まないのはこっちですよ」

少年はまだ慌てていた。だがもう森川の足の傷口を洗っていた。

「こんなことまでして頂いて。それで怪我まで」

「こんなもの昔から普通だった」

「普通とは？」

「怪我のことだ。ああ、いい」

森川は少年から布と桶を受け取った。そして自分で手当てをしな

がらそう言った。

「自分でやるからな」

「はあ」

自分で手当てをはじめた。そんな彼に少年はまた問うた。

「それで普通とは」

「怪我のことだ」

彼は言う。

「こんなのは普通だったのだ」

「そんな深い怪我也」

「看守の時もな。何かとあってな」

この場合は囚人達とのことではなく様々な作業だ。森川はそれも自分からやっていたのである。自分が汚れることを厭わなかったのである。

「それでだ」

「そうだったのですか」

「うむ、気にすることはない」

そう言って少年を落ち着かせる。

「これでわかってもらえたかな」

「駐在さんは凄い人なんですね」

「凄い！？わしがか？」

かえってこの言葉には戸惑いを見せる。

「ええ。そうやって自分から危険なことに向かわれて怪我までされたのに。そんなことを仰って」

「武士はな、そうじゃったからな」

「武士！？」

あまり聞かない言葉であった。台湾においては。

「それは何でしょうか」

「まあ簡単に言うと軍人だ」

「軍人ですか」

森川はわざとわかりやすいようにそう説明したのである。

「左様、軍人としての心得か。もっと広く言うと日本人の気構えか」
「日本人の」

「あんたも日本人なんだぞ」

「俺がですか!？」

「他の何だというんだ。ここは日本なのだ」
「はあ」

こんなことを言われたのははじめてであった。今まで彼等は野蛮人だの蛮族だの言われてきたのである。だが森川は彼等を日本人と呼んだ。そして同じ目線で語り掛けてきているのである。

「それでは当然だろう、あんたも日本人だ」

「俺も駐在さんと同じ」

「そう、同じだ」

ニコリと笑って述べた。

「日本人なんだ」

「じゃあ俺もその武士になれるんですか？」

何か狐につままれたような顔になって問う。

第五章

「俺みたいなのでも」

「勿論だとも」

それに対する森川の返事もまた彼にとっては信じられないものであった。森川にとっては当然のことであってもである。

「わしもな。しがな農家の出だったのか」

「俺達みたいにですか？」

「そうだな。同じかな」

昔を懐かしむ目をして語る。

「子供の頃からな。何かと泥に塗れていたさ」

「そうだったんですか」

「だがわしでもこうして昔ならその武士がやる職務に就いている。だからな」

「俺達も」

「そう、武士になれる」

そう言って少年を見る。

「だから頑張るんだ」

「はい」

まるで雷に撃たれたかのような衝撃だった。彼にとっては信じられない言葉であった。

「駐在さん、俺やります」

森川の顔を見て言う。余り背の高くない森川を見上げるといつ「とはなかった。」

「立派な武士になります」

「そうか、頑張れ」

森川はそんな彼に声をかける。

「そしてな」

「ええ」

「立派な人間になるんだ」
「わかりました」

こうしたこともあった。森川は村民達と共に生き、共に笑っていた。そうして彼等の為に尽くしていた。だがそれは不幸な形で幕を降ろすこととなった。

早魃が起こったのだ。それも類を見ない程の。貧しい村はこれで忽ちのうちに窮することとなった。

「大変なことになってしまった」

森川はその事態を見て深刻な顔になった。

「人々は餓え、しかも匪賊まで出るとは」

食べるものもなく安全まで脅かされている。この村に来て依頼の危機であった。

「どうすればよいものか」

「私達は大丈夫です」

長老は心配してやまない彼にそう言って安心させようとした。

「ですから」

「いや、そうではありませんまい」

だが森川は村民達のことは誰よりも知っている。それが嘘であるのはすぐにわかった。

「このままでは村は」

「ですが早魃ですし。どうしようも」

「いや」

だが彼には考えがあった。

「何とかあります」

「その何とかとは」

「まずは私の家に餅や礼物があります。それを皆さんにあげましょ
う」

「しかしそれだと駐在さんが」

「何、大丈夫です」

長老を安心させる為に微笑んだ。

「私は国から給与を頂いておりますので」

それはかなり少なく、しかもそれから教師を雇っているのだ。生きていくのに本当にギリギリであったが彼はそれは口にはしなかった。

「御安心下さい」

「はあ」

長老もまた森川のことはわかっていた。だが彼の心を察し何も言えなかったのである。

「ですから」

「わかりました。では」

長老は彼の贈り物を受けることにした。

「有難く頂きます」

「ええ、どうかこれで窮を凌いで下さい」

森川は餅等を村民に贈った。これで何とか糊口を凌いだ。しかし、今度は別の問題が起こったのである。

総督府が漁場に対して税をかけることを決めたのである。これは貧しい村にとっては一大事であった。今でも生きるか死ぬかであったのにこのままでは生きることが出来ない。森川をまた苦悩が襲ったのであった。

森川は村民達の声を聞き、そして辺りの村が何処も大変な窮状にあることを調べた。そしてそれを持って上司のところに向かったのであった。

彼は暑に入った。そこで園部という警部と会った。彼の上司である。

「税を免じて欲しいというのか？」

「はい」

森川は答えた。二人は今園部の部屋で向かい合っていた。森川が立ち、園部は座って話を聞いていた。

「早魃もあり今のままでも生きるか死ぬかなのです。それで今税を増やされると」

「村が立ち行かなくなるといふのだな」

「その通りです」

森川はその言葉にこくりと頷いた。

「ですからここは」

「森川巡査」

園部は彼の顔を見上げてその名を呼んだ。

「今我が国がどういふ時なのかわかつているのか？」

「それは」

「わかっているだろう。下手をすれば露西亞との戦争だ」

園部は深刻な顔で森川に語った。

「露西亞は強い」

「はい」

「勝てると思うか？思わないだろう」

「それはそうですが」

両国の力の差は圧倒的だ。正直に言えば誰も勝てるとは思えないものがある。それは誰もがわかつていた。当時の指導者達ですら。あの山県有朋ですら。最後の最後まで迷っていたのだ。そうした相手だったのだ。だがやらなければならなかった。それもまた事実であつた。

「今は少しでも力が必要だ」

「その為ですか」

「そうだ。だからこそだ」

「それはわかります」

森川は一旦はそれに頷いた。

「ですがそれでも」

彼は村民達の為に。あえて言ったのである。

「お願いできませんか」

「無理だ」

園部は首を横に振った。

「これは台湾全体のことなのだ」

「しかし」

「では森川」

園部は森川の顔を見据えた。

「では君は。ロシアに敗れてもいいのか」

「それは・・・」

「負ければどうなるか。わかっているだろう」

「・・・はい」

苦渋に満ちた顔で頷いた。

「この前の北京の騒動で奴等は相当なことをしたのは聞いております」

「奴等は鬼だ」

園部は言った。

第六章

「どんなことでもするぞ」

「わかつております」

森川も露西亞のことは知っている。ロシア兵の軍律の悪さは義和団事件において日本人を驚かせ、そして驚かせるのに充分だったのだ。その蛮行は日本軍のそれとは対象的でした。日本軍はその規律正しさと賞賛を受けていたのである。これもまた事実であった。

「だからこそなのだ」

「露西亞の手にかからぬように」

「それでわかったな」

「・・・・・・」

「不服か？」

園部は問うた。

「そのことに」

「やはり駄目なのですか」

「皆今は耐えておるのだ」

園部はまた言った。森川の顔を見据えながら。

「わかるな」

「ですが彼等は」

「嫌なことを言おうか？」

園部の顔が暗くなった。

「何をでしょうか」

「君が大切にしている村民達もまた日本人だ」

「ですが彼等は」

「確かに徴兵もされなければ権利も制限されているな」

「はい」

その通りであった。だからこそ森川も彼等の為に頑張っているの

だ。

「だがそれでも彼等は帝国臣民なのだ」

「それはあまりにも勝手では」

森川も言わずにはいられなかった。日本人と言つてもやはり何処かで彼等を異民族と扱っているのもまた事実なのだ。この差は後に日韓併合の後で朝鮮半島が日本の領土となつてからはつきりと出てきた。朝鮮人は士官学校に入ることができ、高官になる者すらいた。陸軍中將にまでなつた者すらいる。

これに対して台湾人は士官学校には入れなかった。国立大学に入ることは可能であつたが。それでも日鮮同祖論の爲同じ民族として扱われたところのある朝鮮人とは扱いに差があつたのだ。ここが複雑であつた。

「そう思うなら思えばいい」

園部は森川の言葉を突き放してきた。

「だが変えられはしない」

「村民達に死ねと」

「今は皆が耐えなければならんだ」

彼はまたそれを言つた。

「彼等だけではないのだ。それがわからんのか」

「……わかつてはいても」

森川は言葉を吐き出した。血を吐く様に。

「それでも」

「そうか。ならもう言うことはない」

園部もそこまで言われては。断を下すしかなかった。森川に対して。

「森川清治郎巡査」

森川の官職氏名を呼んだ。

「君を処分する。戒告だ」

「左様ですか」

「そうだ。上司に逆らい、そして村民を惑わしたことになる」

森川を見る目は複雑であった。厳しくはあつたがそこには他の、
様々な色もあつた。

「わかつたな。頭を冷やせ」

「……はい」

「わかつたならばいい。行け」

森川に部屋を去るように言った。

「もう言うことはない」

「わかりました」

森川は敬礼をして部屋を去つた。もう何も言わなかつた。園部は
その背中を一人黙つて見送つていた。

「今は何があつても勝たなければならぬのだ」

そして一人こう言った。

「何があつてもな。日本の為に」

森川も園部も互いのことが痛い程よくわかつていた。園部も森川
の立場なら同じことを言つていたかも知れない。だが。彼は今の立
場からはそれはとても出来なかつたのである。言えもしなかつた。

だからこそ森川にも断を下した。全体の為に。森川の心をわかっ
たうえでだ。

「……許せ」

最後にこう呟いた。そして職務に戻る。何もなかつたかのように。
森川は村に戻つた。そのうえで村民達に対してこの次第を説明
した。

「……左様ですか」

「はい」

森川は俯いて村民達に答えた。

「申し訳ありませんが私の力ではどうにもなりませんでした」
俯いたまま振り絞るようにして述べる。

「今我が国は。露西亞とのがありますので」

「露西亞というとの」

「駐在さんが話しておられる」

「はい、あの国です」

森川は告げる。

「あの国と戦うならば力が必要なので」

「そうなのですか」

「それでは」

「お願いします」

深々と頭を下げた。

「こうなつては言うことがありません。皆さんにはどうか」

「いえ、よいのです」

長老が頭を下げる彼に声をかけた。

「駐在さんはよくやって下さっていますし」

「そつでしようか」

「そうですね、いつも俺達の為に」

「なあ」

村民達は声を揃えて言う。

「それに今度のことだつて」

「わし等が無理を言つて」

「ですがどうにも出来なかつたのは事実です」

それでも潔癖な森川は村民達の声に甘えることは出来なかつた。

「それは。変えることができませんでした」

「駐在さん……」

「この度のことは何と言つていいかわかりません」

そしてこう述べた。

「それだけです。それでは」

「駐在さん……」

村民達はもう何も言うことは出来なかつた。森川は彼等の前から姿を消した。そのまま宿舎に閉じ籠つた。村民達はそんな彼を見て不吉なものを感じずにいられなかつた。

「大丈夫かな」

「ああ、そつだよな」

彼等は顔を見合わせて言い合つ。

「若しかすると」

「おい、馬鹿なこと言つな」

「けどよ」

その不吉なものを消すことができないでいた。

第七章

それから間も無くのことであつた。村に銃声が鳴り響いたのは。それは村民達が最も聞きたくない音であつた。

彼等はそれを聞いて身構えた。すぐに銃声のあつた方へと向かう。

「こつちだ」

「ああ」

そこは村の廟であつた。古い、今にも朽ちそうな廟の開かれた扉の向こうで。森川がうつ伏せになつて倒れ伏していたのである。

「駐在さん！」

呼び掛けても返事はない。その手には銃がある。 8

森川は自害したのであつた。村民達への謝罪の為に。命をもつて謝つたのであつた。

「何でこんなことを……………」

「わし等の為に……………」

村民達は泣いた。心の奥底から泣いた。自分達の為に尽くし、命をもつて謝罪した森川の為に。彼等はそんな彼のことを心に刻み込むのであつた。

その僅か三年後には妻ちよが夫の後を追うようにしてなくなり、息子であつた真一は台湾において教師となつた。村民達は時が移り、その縁者もなくなり、成長していく中でも森川のことを忘れてはいなかつた。村の長老もなくなり、その子が跡を継いでいた。森川の死から二十年が過ぎようとしていた。

その頃村では疫病が流行つていた。皆これに苦しみどうしようかと考えていた矢先であつた。

長老の子である保正李九の枕元に一人の男が姿を現わした。

男は警官の服を着た小太りの髭の男だつた。それが誰か、彼はよく覚えていた。

「駐在さん」

「お久し振りです」

森川は笑顔で彼に挨拶をした。

「お元気そうで何よりです」

「え、ええ」

保正はこれは夢だと思いながら森川に言葉を返した。

「どうしてこちらに」

「実はお伝えしたいことがあります」

森川はニコリと笑って彼にこう述べた。

「伝えたいことは？」

「今村に病が流行っていますね」

「はい」

その通りである。頷いてそれを認めた。

「それで今困っているのですが」

「それについてですが」

森川はここで言った。

「収める方法があるのです」

「本当ですか!？」

「はい」

声をあげる保正に応えた。

「それは薬でしょうか」

「いえ」

森川はそうではないと言う。

「祈りではないですよね」

「それでもありません」

「それでは一体」

「私が皆さんにお教えしたことを思い出して下さい」

森川はいぶかしがる保正にそう述べた。

「何をお教えしたのか」

「確か」

言われて考えを巡らす。

「村自体を奇麗にして、食べ物にも気をつける」

「そう、それです」

それを聞いたところでにこりと笑った。

「その通りです。ではおわかりですね」

「それでしたか」

言われてようやく気付いた。

「今まで忘れておりました。だからこそ常に周りを奇麗にせよと」

「これからも病はありますので。御気をつけ下さい」

森川はまた言う。

「宜しいですね、それで」

「わかりました」

保正はそれに応える。

「有り難うございます、では早速」

「村民達にお伝え下さい」

森川は最後に述べた。

「私がお教えたことを忘れないようにと」

「は、はい」

「私が願うのはそれだけです。それでは」

森川はすうつと姿を消した。その顔は最後まで笑っていた。笑っ

て姿を消した森川の後には。青い空が広がっているだけであった。

保正は目が覚めるとすぐにそのことを村民達に伝えた。皆が森川

が言った通りに周りを奇麗にするとそれで病はなくなった。全ては

森川の言った通りであった。

「また駐在さんに助けられたな」

「ああ」

村民達は病が鎮まった後で互いに顔を見合わせてそう言い合った。

「死んでからもわし等を見守って下さっていたのじゃな」

「本当に有り難い方じゃ」

「それでな」

保正はここで村民達に対して言った。

「わしは駐在さんを神様として祭ろうと思つたのじゃ」
「駐在さんをか」

「そうじゃ、生きておられる時はわし等の為に尽くされ」
さらに言つ。

「死んでからもわし等を見守つて下さっている。神様に相応しくはないか」

「そうじゃな」

「確かに」

村民達もそれを聞いて頷き合つ。

「ではそれでよいな」

「うむ」

「是非そうするべきじゃ」

皆保正の言葉に頷く。

「それがあの方へのご恩になるな」

「わし等の為に死んでからも尽くして下さるあの方への」

「駐在さん、見てますか」

保正は森川がいた駐在所を見て言った。

「わし等、ずっと駐在さんを覚えておきます。貴方のこと、忘れません」

こうして森川は神として祭られることとなったのである。呼び名は義愛公。義に篤く、常に仁の心を忘れなかった森川を讃えての呼び名であった。人々の為に尽くした森川はこうして神となり異国で祭られているのである。長い長い時代が過ぎても、今こうして祭られているのである。

「そうした事情があったのですか」

私はお年寄りのコーヒーを飲みながら話を聞いていた。話を聞き終えて何か夢の様な気持ちになった。

「台湾にそこまで尽くした日本人がいたなんて」

「意外でしたか？」

お年寄りはお私の方を見てにこりと笑って尋ねてきた。

「御先祖にその様な方がおられたことを」

「ここでの日本人のことは少しは聞いていますつもりでしたが」

「はい」

「それでも。そこまで素晴らしい方がおられたとは」

「これは本当の話なのですよ」

お年寄りは優しい笑みを浮かべてまた言った。

「だからあの像があるわけでした」

「はあ」

「あの像は一時大変なことになりかけましたが」

「大変なこと？」

私はそれが何か最初わからなかった。

「何ですか、それは」

「ほら、日本が戦争に負けた後ですよ」

「ああ、第二次世界大戦ですね」

「あの後ね、国民党が来まして」

「ああ、それですか」

そう言われて話がわかってきた。こくこくと頷く。

「日本のものは全て禁止で。私もやっと覚えた日本語を表では話せなくなりました」

国民党の政策は徹底していた。日本文化を全否定したのである。

蒋介石は己の権力を固める為にそれをした。またかなりの独裁政治を敷いたことも私は知っている。

「それであの像も」

「壊されそうになったのですか」

「そんなの我慢できるものではありませんよ」

お年寄りは笑みを浮かべていたがその声には芯があった。

「私等の為に命まで捨ててくれた駐在さんの像を壊されるなんて。それで」

「それで。どうされたんですか？」

私は問うた。コーヒ―を口から離して。

「中国の服を着せたんですよ」

お年寄りはニコリと笑ってそう答えた。

「中国の服をですか」

「ええ、それだと向こうにもわかりませんでしたね」

「そうでしょうね」

これは私にもよくわかった。

「あれで中国の服だとそのまま関帝廟ですからね」

「ええ、そう思った国民党の人間もいましたよ」

「やっぱり」

「ですがね」

ここでお年寄りはうつすらとした笑みになった。

「私等にとってはあの方は関羽様よりもまだ尊い方なんですよ」

「そうなんですか」

「そうですよ。だってあの方は日本人だったんですよ」

「ええ」

「それなのにね。台湾人の私達の為に尽くして下さい」

「同じ日本人だと言ってですよ」

「やっぱり素晴らしいですよ。普通は出来ません」

「こつも言った」。

「民族が違うのにね。同じだなんて」

「そうですね。僕にも何か信じられない話です」

「しかし本当なんですよ」

「ですよ」

そう言われてもやはり実感が湧かない。まるで夢みたいに見える仕方がない。

「不思議ですよ」

「はい。本当に不思議なまでに素晴らしい方でしたよ」

それからお年寄りは言った。

「私のお爺ちゃんも助けてくれましたし」

「お爺ちゃんとは!？」

「わかりませんか?ほら」

私の顔を見て言う。温かく、穏やかな笑みになって。

「あの海の中で怪我をした男の子」

「ああ、あの人が」

言われてようやく気付く。

「そうなんですよ、あれは私の祖父なんですよ」

「そうだったんですか」

「私はね、お爺ちゃんに日本語を教えてもらったんですよ」

「あの人に」

「店も残してもらってね。森川さんに助けてもらってから頑張って日本人が持っているみたいなのが嬉しい喫茶店作ってそのマスターになるんだって頑張ってる」

「はあ」

「父が二代目で、私が三代目です」

「三代ですか」

「ええ、こっそりと日本の雰囲気というのを残してきましたよ」

「それがこのお店」

「そういうことです」

またにこりと笑ってきた。

「どうでしょうか」

「僕はあの頃の日本は知らないですけどね」

私はまずこつ前置きした。

「けれどこのお店は」

「はい、このお店は」

「好きになりました。そしてお爺さんも」

「有り難うございます」

「それにこの話は忘れられません」

この店とお年寄り、そしてコーヒー以上に。私の心に残った。
「何があってもね」

「そうした日本人がいたことに」
「はい」

その言葉に頷く。

「そしてその人がしたことを忘れていない私達がいることを」

「忘れはしません、何があっても」

「ではまたこれからも」

「来て宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

それが別れの言葉だった。それも一時の。

遠く南にある筈のこの島に日本人の足跡があった。それを今でも覚えていてくれて、讃えてくれる人がいる。私はそのことを何時までも覚えていようと思った。何時までも、何時までも。

義愛 完

2006・9・25

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4740b/>

義愛

2008年8月29日18時24分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。